



ダブル美少女の心を読んで  
ラブ奴隷に落とした件

DOUBLE READING MAGES - GIRLS LOVE SLAVE

小説 筆祭競介 挿絵 みずゆき

立ち読み版

序章	モテるようになりたいです	006
第一章	ダブル美少女にモテモテで浮かれてしまった件	022
第二章	Hな乙女の恋心は読めていても予測不能	071
第三章	初恋お姉さんとドキドキらぶらぶ初体験	115
第四章	ドMお嬢さまは俺の生ハメ専用犬ペット	160
第五章	ダブル美少女と3Pシユラバな件	205
終章	なぜ乙女の恋心が読めなくなってしまったのか	250

## 登場人物紹介

Characters



### てらかぜあや か 寺風綾佳

崇雄の年上の幼馴染み。物心ついたころからいっしょにいて、崇雄のことを弟扱いしてくるが、実はそれは愛情の裏返しで……!?



一緒に帰ろうって誘って欲しいな。

これで……私のことを

見直してもらえるかしら……◇



ほうらいいなかで

### 蓬萊院 奏

大企業ホウライイングループの令嬢。崇雄のクラスメイトで、崇雄に対していつもツンツンとした態度を取っている。

ふじかわたか お

### 藤川崇雄

困っている人を助けずにはいられない男子学生。神様を助けたことで女の子の心を読む能力を手に入れる。

その瞬間、勃起ペニスがビクンと自らのヘソを叩くように漲った。

「わわっ!? ど、どうしたの?」

綾佳がとんでもないことを考えているから、と言うわけにもいかず、崇雄は慎重に口を開く。

「い、いや、その……俺も……アヤちゃんのおっぱい、生で見たいな、と思って」

「なにそれえ。強引にそんなのを見せておいて、だから私のおっぱいまで見せろってえ」  
いやいやいや。

自分はあくまで綾佳の心の声に応えているだけで、そんな風に言われるのは心外だ。

しかし心を読んでるのは秘密だし———なにより相手は女の子である。

ここまで来たら、スケベの汚名は全て男である自分が被るべきだろう。

「ねっ。お願い。俺にもアヤちゃんのおっぱいを見せて」

少年は下半身裸のまま、両手を合わせて拝むように頭を下げる。

「もお。本当にしようがないんだからあ」

口調だけは渋々だが、綾佳はますます瞳を熱く潤ませて、自ら制服シャツの前ボタンを外していく。すると中から、可愛らしいフリルの付いたブラジャーが現れた。

（うわっ!? すごッ!）

と崇雄が思わず感嘆したのはその下着のデザインではなく、二つの乳房が密着している

谷間部分の深みである。

ブラに収まりきっていない柔肉が胸の中心で重なりあい、むっちりと盛り上がっていて、とんでもなくエロティックだ。

「……ターくんってば、本当に私のおっぱいが好きなんだからあ」

そして綾佳が両手をさらに後ろに回し、ブラのホックまで外してくれる。

その直後、この特大バストを包み込んでいた構造が崩れ、タプン、と胸の谷間の重なり合いが緩み——大きなカップの布キレが床に落ちた。

「ツツツツツ!?」

崇雄の視線は目の前に現れた二つの丸みに釘付けだ。

ほっそりとした鎖骨の下から魅惑的な曲線を描き、小指の先ほどの鴉色の頂点へと向かう牝肉の圧巻の盛り上がり。そして下乳はこれほどのサイズにもかかわらず、弛みや緩みはまるでなく、ピチピチの乳肌が張り詰めて綺麗な丸みを維持している。

（こ、こんなに綺麗なおっぱい……マジで……は、初めて見た……）

崇雄も年頃の男子なので、その手のグラビアや動画を見たことは何度もある。

しかし自分が知っているどんなヌードモデルやセクシー女優よりも、綾佳の乳房は美しいと思った。

先ほどまでこの乳房を自分が好きなように揉んでいたかと思うと、それだけで鼻血を吹

き出しそうになつてしまふ。

「なんかすつごい目で私のおっぱい見てる♥ やっぱり皆の言つてた通りだ♥ 私のおっぱいならどんな男の子でも夢中になる、つて♥ えへへ♥ 嬉しいよお♥」

どうやら彼女は、女友達からも絶賛されていた自慢のバストを恋人にも披露したかったようだ。それで彼女も自ら『見せたい』と思つたのだろう。

「す、凄いよ、アヤちゃんのおっぱい。こんな綺麗なおっぱい、初めて見た」  
彼女をさらに満足させる意味もあり、思つたことをそのまま口にする。と。

「ターくんのスケベ。いったい何と比べてるの、それ。Hな本とかじゃないでしょうね」  
彼女の口調は終始こちらを責めるようだったが、

「やつた♥ ターくんにはつきりと褒められちゃつた♥」

本心では女のプライドがたつぷりと満たされたらしく、とても嬉しそうだ。

「おちんちんもこんなにしちやつて——えい♥ お仕置きだぞ♥」

そんな時に、再び股間を綾佳に——今度は直接掴まれた。

「はうううん!!」

初めて異性に勃起ペニスを直接触れられて、それだけでイッてしまいそうになり少年は慌てて奥歯をグッと噛み締める。

「すつごく熱くてガッチガチい♥ でもコレ、ただ触るだけで本当に喜ぶのかな?」

どうやら経験済みな友人たちから勃起肉の知識までも、それなりに仕入れてきているらしい。しかし現実の綾佳はそんな知識はおくびにも出さず、むしろキョトンとした感じで小首を傾げてくる。

「ん？ 痛かった？ お仕置き、つてのは冗談だったんだけど？」

「い、いや……き、気持ちよかった」

「へー。そうなんだあ。……どれどれ？」

綾佳は何くわぬ顔をしてそのまま床に膝をつき、じつくりと男根を凝視してくる。

（……ああつ。……アヤちゃんのおっぱいが……）

そのため目の前で終始ユサユサと揺れていた特大バストが遠ざかり、若干、テンションが下がりがける。が。

「ッはあうん!!」

こちらの股間の前に跪いた幼馴染みに、ペニスを再び握られて、眉間にまで鋭い愉悅が迸ってくる。直に触れた彼女の指は少しひんやりとしていて、自分の指と比べて明らかに細いの、とても柔らかかった。

対して綾佳の興味は、間近で見る男性器に集中している。

〈ああん♥ 本当にエッチな形♥ 見るだけでドキドキしてきちゃう♥〉  
そんなことを考えながら、男の反応を確かめるように指をゆっくり動かしてきた。

「そ、そこ……そ、そんな風にされると……つくふぁ」

「……へえ。こうされるのが気持ちいいんだ」

綾佳は右手の中指から薬指と小指で竿肌を巻き込むように包み、親指と人差し指で、亀頭部分を撫でてくる。

しなやかな指の腹に、特別敏感な肉傘の裏や先端を擦られるたびに、喉の奥から愉悅の聲が漏れてしまう。

〈うわぁ♡ ターくんったらこんなにビクビクしちゃって、何か楽しい♡〉

恋人を自分が感じさせていることがよほど嬉しいようで、綾佳の美貌がさらに輝き、慎重だった指の動きも積極的になってくる。

「ダ、ダメだって、そんな風にしちゃ。す、すぐにイッちゃうから」

〈へえ♡ 私、こんなことするの初めてなのに、結構上手いのかな♡〉

綾佳は心の中で嬉しそうに、にんまりと笑っている。それでいて――。

「な、そのイクっていうのぉ？」

表面上はいまだにウブなふりをしている彼女が、今は小悪魔にしか見えない。

「も、もう！ だいたいのは知ってるでしょ！ 友達とかに聞いたことあるクセに！」  
思わず心の内を読んで知った内容を口にしてしまったが――綾佳は不審がることもなく「えへへ♡」と恥ずかしそうな笑みを浮かべてくるのみ。



「ターくんってば、私のすることなら本当に何でも許してくれそう♥」

今の彼女は、崇雄をからかって楽しんでいるわけではない。綾佳の方から積極的に行動はしているが、それはあくまで恋人に甘えている一環なのだ。

（やっていることは年上のお姉さんっぽいけど、中身はやっぱり、ちょっと我儘な妹キャラのままなんだよな！）

そんな年上の幼馴染みのことを、改めてたまらなく可愛く感じてしまう。

「んゝ、なんのことかなあ。知らないよぉ」

彼女はおどけた声でそんなことを言いながら、さらに右手を大胆に使ってくる。

結果、彼女の二の腕が豊かすぎる胸に当たって、上から見下ろす二つの膨らみがプルンプルンと小刻みに揺れ出す。

「あゝ♥ また私のおっぱい見てるう♥ ターくんって、おっぱい星人なんだね♥」

「い、いや、そういうわけじゃなくって！」

特別、胸が好きではなくても、普通の男ならどうしたって、この素晴らしすぎるバストには目がいつてしまうはずだ。

「えへへへ。ねえ、それじゃあさあ。おっぱいで……してあげようか♥」

「え？ えええ!! パイズリしてくれるの！」

「へへ。そーいう名前なんだあ」

「それだって知ってるくせに！」

「知らないよぉ。も。カノジョにいけないことばかり覚えさせてえ♥」

「な、何言ってるんだよ。アヤちゃん、絶対知ってるでしょ！ そうじゃなきゃ、そんなこと言ってるじゃないよ！」

「なによぉ。パイズリして欲しくないの？」

「そ、そうは言ってるじゃないよ！ して！ 今すぐして！」

あれほど気持ちよかった綾佳のバストで、男根を挟んでもらえるなんて……。想像しただけで暴発しそうになってしまう。

「私のおっぱいに必死なターくんがたまらないよぉ♥ だから……もうちょつと焦らしちゃおうかな♥ もっともつと、私のこと好きって言ってもらいたいし♥」

しかも年上お姉さんのこんな小悪魔ボイスが頭の中にこだまするからたまらない。

「私のこと、好き？」

「好き！」

「それじゃあ、私とおっぱい、どっちが好き？」

「そ、それは……どっちも好き！」

「あ。今、おっぱいって答えそうになったでしょ？」

「おっぱいも何も、それもアヤちゃんの一部でしょ！」

綾佳の心を読むと、とにかく『好き』だとたくさん言ってもらいたいようだ。

「とにかく大好きなアヤちゃんの、大好きなおっぱいに挟んでもらいたい！」

一刻も早くパイズリしてもらいたい少年は、駆け引きなどすることもなく叫んでいた。

「うふふふふ♥ ターくんがそこまで言うならしょうがないなあ」

たつぷりと女の喜びを堪能した綾佳は、心底嬉しそうな笑みを浮かべつつ、膝で歩いて身体を寄せてきた。

崇雄はそれを見て反射的に腰を突き出し、胸で挟みやすいように自ら両脚を大きく開いてしまう。

「もう♥ そんなに早くシテ欲しいんだ♥」

興奮しきっているこちらの様子に、綾佳はますます嬉しそうに目を細め、そして上半身を寄せてきた。パイズリに対する期待感でこれ以上ないほど筋張っている男根が、彼女の深い胸の谷間に置かれる。

「するよ♥」

「早く！」

「うん♥」

綾佳が、自らその豊かすぎる乳房を両手で脇からすくうように寄せあわせた。

「ッはああああうん！」

その直後、ペニス全面を押し包んだ柔らかな衝撃に、少年は大きく仰け反ってしまった。  
先ほどまで指で扱しらかれていたので、比べればそちらの方が刺激自体は強い。

しかし乳房はゴツゴツした肉棒の形に合わせて柔らかく形を変えるため、密着感はこちらの方が遥かに上である。しかも綾佳のバストは中にたっぷりと牝肉が詰まっているため、これほど柔らかいのに、手コキの時に劣らない圧迫感もある。

「私のおっぱい、気持ちいい？」

うっとりと目を細めている綾佳の間に、崇雄はコクコクと頷いた。

「へもお♡ そんなに気持ちよさそうに頬をプルプルさせちゃってえ♡ これでおっぱいでさすってあげたら、どうなっちゃうんだろ♡」

そんな明らかに弾んだ心の声が聞こえてくるため、崇雄もすぐに口を開く。

「う、動かして、アヤちゃん！ 早くおっぱいを！」

「うん♡」

綾佳は待つてましたとばかりに、両脇から寄せあわせている乳房をゆっくりと揺すり出した。

「つくふぁ!!」

その直後、股間から迸ってきた強烈な快感に、思わず鋭い声が漏れてしまう。

「わわっ!! ターくんのオチンチンが、おっぱいの中で跳ねるみたいに反り返った!!」

彼女の言う通り、ペニスを丸ごと覆い尽くしているポリューム感満点の肉悦に、思わず暴発してしまいそうになる。

（凄いいよこのパイズリ！ こんな気持ちよさ、他のおっぱいじゃ絶対に味わえないよ！）  
自分の肉棒の形に合わせて変形し、綾佳の巨乳は隙間なく竿肌と密着している。

その特大バストの中に詰まった乳肉の粒子が僅かな動きで流動し、この質量でなければ決して味わえない、極上の肉悦をもたらしてくれる。

「ほらほら、どうなの私のパイズリ？ なんだか苦しそうな顔をしてるけど、気持ちよくないの？」

奥歯を噛み締めている崇雄を見上げながら、胸をタプタプと揺らしつつわざとおどけた顔で訊ねてくる。

心の声を聞くまでもなく、こちらが本当に苦しんでいるなどとは全く思っていないのが丸わりの言動だ。むしろ違うと否定されていることを望んでいる。

「もっと気持ちいいって言って♥ もっともつと私のおっぱいを褒めて♥」

それはまるで幼い妹が、兄に肩叩きでもして、それを褒めてもらおうとしているような無邪気さだった。決して、経験豊富な年上のお姉さんが、年下の恋人のウブな反応を楽しんでいるような心情ではない。とにかく見た目とのギャップが強烈すぎてたまらない。

「気持ちいいよ！ アヤちゃんのおっぱい最高だよ！」

自分の手でするオナニーなど比喩物にならない肉悦量に圧倒され、頭がともに働かず、相手が望んでいる返事をそのまま口にしてしまう。

「あはあゝゝん♥」

綾佳の美貌に浮かんできたのは、幼い女の子が肩叩きを褒められて浮かべるような、無邪気な笑顔——底抜けに明るい、喜びの爆発だった。

「それじゃあ、もっともっと気持ちよくしてあげるね♥」

改めて掌を大きく広げ、横乳全面を全ての指で包み込むようにして、両手の動きをスピードアップさせる。

しかも並の大きさなら不可能だが、綾佳ほどのサイズだと、崇雄をしつかりと挟んだまま左右の乳房を上下別々に揺さぶりまくれる。

—— たぶたぶタプン！ むにゅズリたぶン！ むにゅむにゅタプン！

「つくふあああ！ ああつ！ つくふあああああああ！」

男根の先端から根本までを、柔らかな乳肉にあらゆる角度から擦り上げられて、脳天にまで突き抜けてくるような快感が迸る。

（た、たまらないよコレ！ おっぱいの中に完全に埋まってるのに、アヤちゃんのおっぱいを丸ごと味わってるみたい！）

いっばいに開かれた彼女の細指が、豊かな乳房を左右からしつかりと包み込んでいる。

そのため、特大バストの全質量が、余すことなくその中心へ——己の男根へとギュッと凝縮しているように感じる。

「だめええ！ マジでイッちゃうよ！ 気持ちよすぎて本当にイッちゃうよおお！」

特に左右別々に揺さぶられている二つの乳房が、横一直線に並んだ瞬間の快感量が凄まじい。ペニスの側面からもたらされる柔らかな圧力が、その瞬間だけ左右完全に一致するため力が逃げず、肉棒の芯までバストの全質量が染み込んでくる。

「ターくんってば、この時が一番気持ちいいんだ♥ それじゃあ――」

勘のいい綾佳が、こちらの反応からそのポイントを悟り——今度は乳房を左右からギュッと両手で強く寄せあわせたまま、上半身をダイナミックに上下させ始めた。

「ああ！　そ、そんな！　そんなのだめええええええええええ！」

大きく開いている太腿の内側が勝手に震えてしまうほどの肉悦に、仰け反らせ続けていた顎を戻し、思わず己の股間に視線を向けた。すると先ほどまで完全に、綾佳の巨乳に埋もれていた己の男根が、僅かにだが先端だけチラと見える時がある。

(うわっ!?)

その瞬間、空間を把握する脳領域が、慣れ親しんだ己の勃起サイズと、むっちりと盛り上がった二つのバストを重ねあわせて——改めてその圧倒的な巨乳ぶりを認識する。

ああ。このめちゃくちやでつかいおっぱいに、俺のチンチンが挟まれてるんだ。と強烈

に自覚し、肉体だけでなく精神的にも追い詰められる。

「マジでイクよ！ 本当にイッちゃうよ！ このでっかいおっぱいの中で、思いつきり射精しちゃうよ！」

「いいよ！ 我慢しないで！ 好きなだけ気持ちよくなつて！ 私のおっぱいに中出ししてえええ！」

綾佳が口にした乳内射精の許可が、限界ギリギリまで踏ん張っていた少年の理性を跳ね飛ばした。椅子に座ったまま動かさなかった己の腰を、思いつきり彼女の胸に向かって突き出してしまふ。

「ああっつ！ イクっ！ アヤちゃんのおっぱいでイッちゃううううう！」

そう叫ぶと同時に、全身を強く息ませる。

極上バストによって強く押し挟まれ、限界まで細くなった尿道の中を、内側から押し開くように灼熱の粘液が一気に進っていく。

——どりゅん！ ドブドブッ！ どぎゅっどぷん！

自分が腰を突いたことにより、僅かに露出した亀頭から白濁の筋が一直線に送り、初恋相手の細い顎の裏側に直撃した。

「ああん♥ 熱いッ♥」

綾佳は甘くそう呟いただけで、初めて精液を受けたにもかかわらず、ほとんど驚いてい





なかった。それどころか――。

〈やったああ♥ ターくんをパイズリでイカせられたああ♥〉

自分の身体とテクニクで恋人を絶頂まで導いた、女としての喜びの方が大きいようだ。そしてこれも牝の本能なのか、胸に挟んで脈動を続けているペニスに対し、より射精を促すようなねちっこいパイズリを続けている。

「つくふあ……つくふあ……」

そんな極上奉仕の中で少年は長い射精を終えると、無意識に止めていた息を再開させた。仰け反らせていた顎をカクンと戻し、改めて己の前に跪いている幼馴染みを見下ろす。

「えへへ♥ いっぱいイッチャったね♥」

頬を官能的なピンク色に染めながらも、綾佳の表情は無邪気なままだ。なのに顎から喉、細い鎖骨から豊かな胸の谷間に至るまで、ザーメンで白くべったりと汚れている。

見た目だけだと、まるで自分がどれだけエロいことをしたか自覚のない幼女のようなだ。

（アヤちゃんってホント……いい意味で子供っぽいよな）

そのギャップを改めて噛み締めた後、

「あつ。えつと……テ、ティッシュ、ティッシュ」

我に返った少年は慌ててティッブルの上に視線を向ける。と。

へへ。これがターくんの精液かあ。どんな味がするんだろ？ うわっ!? 苦ッ!?

とんでもない心の声が聞こえてきて、びっくりして彼女に視線を戻す。

すると口を閉じて目を丸くしている美貌と視線が合った。

綾佳はこちらと顔が合うなり、口元の辺りに持つて行つていた指をパツと下ろす。

「あ、あのさ……ひょっとして、精液を舐めたの？ 味見したとか？」

こちらの間に、綾佳は口を閉じたままブンブンと顔を左右に振る。

「そんなことしたのバレたら、ターくんにとんでもない変態だと思われちゃうよ！」

崇雄はそのまま数秒、彼女を見詰めていたが「……んなわけないよね」と相手の気持ちを含んで視線をテーブルの上のティッシュに戻した。すると――。

「よ、よかったぁ。バレてないよ。……苦くてちよつと生臭い感じだったけど、アレが

大人の味ってやつなのかな？ 今度は……お口の中に出してもらって飲んでみよ♡」

「ぶっ!!」

「ふわっ!! ど、どうしたの？」

「い、いや……別に……」

軽く小首を傾げ、何くわぬ表情でこちらを見詰めている綾佳の様子に改めてこう思う。

まさかこんな無邪気な顔をしている女の子が、頭の中ではあんな過激なことを考えるなんて、今までの自分は夢にも思っていなかった、と。

※

そして自らの大陰唇に人差し指と中指を押し当てると、

「へし、信じられないほど恥ずかしいですわ。でも……綾佳さんには負けられません」

強烈に恥じらいながらも、恋敵に対する対抗心も糧にして——くばああ♥  
縦筋一本だった牝裂を左右に大きく開いてきた。

（うわっ!!）

肌色の股間にいきなり濃いピンク色が現れて、少年の胸がドキッと弾む。

露出した小陰唇たちはヌラヌラと濡れ光っていて、左右に開かれた大陰唇同士がいつまでも切れない透明の糸で結ばれていた。

「……は、早くココに……ご主人さまが欲しいですわあ♥」

そう誘ってくる奏の声が、極度の興奮と羞恥で明らかに上擦り、尻を支えている太腿もブルブルと震えている。それは決してこの窮屈な姿勢を維持するための、肉体的な震えだけではないだろう。

（こんなカゲキなことしてるけど……奏ってまだバージンなんだもん……）

性的な経験すら、先日のフェラ一回だけのはず。そんな処女のお嬢さまが、首輪姿で四つん這いになり、自らビキニを横にズラして秘部を晒し男を誘っているのだ。

「へし、心臓が口から出てしまいそうなほど……激しくドキドキしていますわ。で、でも……ご主人さまに喜んでいただけるためなら……私、どんなことでもいたします」

「ご主人さまにご奉仕するために生まれてきた、牝犬ペットのバージンおま○こにい、早くご主人さまの生チンポを、奥までぶち込んでいただきたいですわあ♥」

お嬢さまは『ぐばあ』したまま、こちらに突き出している尻をくねくねと振つてくる。それはまさに発情期の牝犬そのもの。

臀部を丸くコーティングしている牝脂の層がプルプルと揺れ、牡の本能を原始的なレベルで刺激してくる。

(……エ、エロい……エロすぎる……)

耳から入ってきた強烈なセリフと、目の前で繰り広げられる痴態。

それが全て、心の底から恥じらっている処女お嬢さまの、自分に対する精一杯の愛情表現だと思うと――。

「あああああ！　かなでえええええ！」

理性があつさりと吹き飛んだ。

崇雄は膝で歩いて目の前の牝尻を片手で掴むと、彼女が開いている牝裂に己の男根をあてがった。

「ンはああん♡」

肉先が、剥き出しにされている桃色の性粘膜を捉えた瞬間、奏が鋭くも甘い声を漏らし、

ずつと正面を向いていた顔をこちらにソツと向けてくる。

「と、とうとうご主人さまとお♥」

そのノールな美貌は一連の言動で耳まで真っ赤になりながらも、感慨深そうに細められた目の端には歡喜の涙が浮かんでいた。

そんないじらしい表情に、いてもたってもいられない気持ちがさらに煽られてしまう。

「本当にこのままスルぞ！ マジで生ハメしちゃうからな！」

極度の興奮状態に陥った少年は、そう叫ぶと同時に思いっきり腰を突き入れていた。

剛直しきった肉先がお嬢さまの蜜壺を一気に貫き、全身の細胞が一瞬で沸騰しそうなほどの快感が炸裂する。

「ンはあああああああああああああああ！」

しかし盛大な叫び声を上げたのは、自分ではなく奏の方だった。

こちらを向いていた彼女の美貌が、身体の内側から弾かれたように前を向いて仰け反り、己の下腹に密着している牝尻がビクビクビクッと激しく痙攣している。

崇雄はすぐにハツとして、視線を二人の結合部に向けた。

するとそこからは、奏が本当に処女だった証が紅の筋となつて流れ出していた。

「だ、だだ大丈夫か!？」

さすがに事が流血沙汰なだけに、無理にドSぶるわけにもいかず、思わずそう訊ねてし



まう。

「……だ、大丈夫ですわ。ま、全く痛く……ありません……わ」

破瓜の衝撃でいまだに女体をビクつかせている奏が、辛そうに歪んだ顔をこちらに向けて、先を促すように頷いてくる。

しかし目の端から流れている涙の筋は、結合直前の喜びの涙と種類が違はず。意識して彼女の本心を覗いてみても――。

「す、凄く痛いですわ。で、でもそんなこと絶対に口にできません。……それでは、ご主人さま専用ペット失格です」

やはりいまだに相当痛いようだ。

（それにしても……アヤちゃんとは、リアクションが正反対だな……）

綾佳の時は痛くないのに痛いと言い、奏は全くその逆で――いかにもそれが二人らしい。（ま、まあ……この前とはここまでの内容が全く違うけど……）

綾佳はロストバージン前にたつぷりと指責めし潮を噴くまで前戯をしたが、奏の場合は彼女がフェラをしただけで、濡れてはいたが前戯らしい前戯をしていない。

そのためか膣壁の締めつけも、今はまるで握り締められているような強さでギチギチだ。奥までしっかりと蜜液で濡れているものの、これでは下手に動かせば彼女をさらに傷つけてしまいかねない。



(ま、まいったな……)

ここまでは崇雄が『命令して』奏に『おねだり』させることで、彼女好みの初体験を進めてきたが、さすがにこの状況ではそういうわけにはいかない。

今までの調子で命令すれば、彼女が痛いのを我慢して、無理をするのは確実だ。

(……………よし。そ、それじゃあ……)

崇雄は深くペニスを埋めたまま腰は動かさず、お嬢さまの背中に覆いかぶさった。

そして左手で改めて首輪のリードを引き、彼女をこちらに向けさせる。

「おい。ご主人さまの生チンポ、気持ちいいか？」

「は、はい。つくふぁ……は、初めてなのに……とつても気持ちいいですう。や、やはり私のバージンおマ○コは……ッ……ご主人さまの生チンポをハメてもらうために、つくう……存在していたようです。ど、どうかこのまま……お好きなように、ご主人さま専用マ○コをお突きください」

「このドスケベ牝犬が。さつきも言っただろうが。ペットの分際で俺より気持ちよくなるんじゃない、つて」

「す、すみません、ご主人さま」

「つたく。おら、罰として生チンコで突きまくるのはお預けだ。俺が満足するまで、コレに口で奉仕しろ」

少年は後ろを向いているお嬢さまに向かい、自分の舌を大きく出した。

すると痛みに歪んでいたノーブルな美貌に、僅かに驚きの色が走る。

「まさかご主人さま……私の身体を氣遣ってくれたんですの？ しかも肉ペットとしての私のメンツが立つように……わざわざこんなご命令を……」

さすが頭脳明晰な奏である。

崇雄のように相手の心を読む力がなくとも、こちらの真意を正確に読み取っていた。

「はああん♥ 申し訳ありません、ご主人さまあ♥」

言葉自体は謝っているのに、口調は語尾にハートマークがついていそうなほど甘い。

「やはり私のご主人さまはこの方しかありませんわ！ 綾佳さんになど渡すわけにはいきません！ この方に尽くすために、私はこの世に生を受けたんですわ！」

そして奏はこちらが突き出している舌に、熱烈にむしゃぶりついてきた。

互いの味覚器官が絡みあった瞬間、ディープキス特有の後頭部が痺れるような快感が炸裂し、崇雄は思わず目を細めてしまう。

「ンツツツツ♥」

逆に奏の方は、その瞳を大きく見開いている。そういえばあれほどハードなフェラ奉仕をしておきながら、奏はディープキスをするのはこれが初めてだ。

舌同士を絡めあうことで発生する、想定外のぬめった快感に驚いているのだろう。

(俺もそうだったもんな……)

こちらからレロンと舌を絡めていくと、お嬢さまの女体がビクッと震えた。

そして丸くしていた目の視点が合うと——レロンちゅ、レロンくちゅレロオオン♥  
すぐに舌が躍り出す。

崇雄の舌を巻き込むようにして舐め上げては、唇を使ってむしゃぶってくる。

それはまさに命令通りの舌に対するフェラチオで、ディープキス経験者の少年もその愉悦に思わず目が細くなってしまう。

特に強烈なのが大きく突き出したこちらの舌を、相手の唇に咥えられての行為だった。そうしてディープスロットでもするようにヌルヌルと舌全体をねぶり上げられると、味覚器官の全てが蕩けてしまうような肉悦が炸裂する。

(あー！ 奏のペロチューもたまんねー！)

本能的に腰を動かしそうになってしまうが、相手の女体はまだ硬いまだ。

理性を総動員して獣欲の暴走を抑えるために、反射的に相手の腰の辺りを握り締める。

(うわっ!? 細ッッ!?)

こうして自らの手でそこを掴むと、男の自分とは骨格から違う、彼女のウエストの細さを実感できる。

崇雄は奏に自らの舌をしゃぶらせたまま、右手をそのウエストから撫でるように滑らせ

て、豊かなバストにまで伸ばす。

(こっちは、メチャデカッ!?)

腰の時とは丸つきり反対の感想だ。否、ウエストの細さが強烈だったからこそ、たつぷりと実ったこの乳房をより大きく感じてしまうのだろう。

「ん♥ んん♥ そ、そんなにはげしく触られるとお——んはぁ♥」

両手で奏の上半身を欲望のまま弄り始めると、こちらの舌を吸っていた唇が官能の声を上げ始める。

セックス中断の我慢をしているだけに、女体を触る行為には遠慮がなかった。

相手に断ることなくビキニのブラを横にズラし、直に乳房を揉みしだく。最初からガチガチに尖っている乳首を摘み、指の腹を使って扱き抜く。

そうして常にどちらかの手で乳房を掴み、もう一方で太腿からウエストにかけてを撫でまくった。その触り方も、綾佳の時のようなソフトタッチではない。美しい牝の肉体を欲望のまま弄る、獣欲剥き出しの荒々しい触り方である。

しかしドMな牝犬には、この愛撫こそが一番感じるらしい。

「す、すみません、ご主人さまぁ♥ すみません♥ ああ♥ すみません♥」

と謝りながら、女体を突発的にビクつかせ始めている。

俺を気持ちよくさせるのがお前の役目だろ、と言われているため、感じていることに謝

っているのだ。荒々しく乳首を摘まれるたびに舌までビクついてしまい、口での奉仕もままならない状態である。

（これだけ感じてゐるなら、もう動いても大丈夫だよな！）

結合当初はあれほどキツかった牝路の締めりも、動ける程度には緩んできた。もともと奥まで濡れてはいたが、愛液の量もさらに増している。

理性を総動員してずっと我慢していた腰の動きを、どうやら始められそうだ。

「つたく。俺のペットはとんでもないエロ犬だな」

「ごめんなさい、ご主人さまあ♥ 本当にごめんなさい♥」

「いったいどうされたいんだ？ お前の大好きなご主人さまのこのチンポで？」

「ああ、そ、それはあ……」

すでにハアハアと息を乱している奏が、ごくり、と生唾を飲み込んだ。

それが初体験に対する躊躇故のものではないことが、

〈ご主人さまが私のエッチな言葉を期待してますわ♥ これが初めてなのに、それでも卑

猥なことを口走る、はしたない牝犬がご所望ですのね♥〉

こうして《乙女恋心》で伝わってきて、崇雄の興奮をさらに煽る。

「奏の中を思いっきり掻き回していただきたいですわ！ ご主人さまのお好きなように、牝犬の初めてマ○コの中を、この生チンポで思う存分——きやううん！」

しかし——レロン、くちゅ、レロっ、ペロ、くちゅれるン。

ペニスに絡みついてくる舌使いは、これが初めてなのでややぎこちないものの、とても優しく、少なくとも怒っている風ではない。

（アヤちゃんは……俺が奏とHまでしてたことを知っても……こんなに一生懸命……）  
彼女の性格を考えれば、奏とのが発覚した時点でビンタの一発もするのが当然だと思う。

しかし今、こうして優しく口で奉仕してくれている。

まだ勃起していない男根に歯を立てることもなく、舌と唇で愛撫して、こんな修羅場の真っ只中ですら、自分に気持ちよくなってもらいたいという確かな愛情を感じさせる。

その結果——びくんッ、びくくくクン！

綾佳に咥えられている男根が、一気に膨張してしまう。

その急激な変化に、これが初フェラの幼馴染みは目を丸くして、口での奉仕が止まってしまった。

「何なんですの！ そのヌルいご奉仕は！ やはり貴女ではご主人さまの口便器は務まりませんわ！」

すると今度は奏が綾佳をドンと押し、勃起ペニスを奪い返す。

「失礼いたします。これより、ご主人さまのおちんぼ専用全自動口便器が、性処理活動を

させていただきます。好きな時にお好きなだけ、どちらのおちんぽ汁でも排泄してください」

奏は再びそう口上を述べると、すぐにペニスを咥えてきた。

唇を窄めてリズムカルに竿肌を扱きつつ、肉棒の裏面にねっとり舌を這わされて、腰の奥まで熱く疼くような肉悦が迸る。

今の『どちらのおチンポ汁』とは、精液だけでなく尿のことまで言っているのだろう。

そのセリフといい、している行動といい、やはり奏は普通じゃない。

しかも今はセックス中の極限状態ではないため、彼女は己の言葉に強く恥じらっている。頬の赤みと、こちらに向けられる瞳の揺れでそれが察せられた。

それでもなお、口に含んだ亀頭の穴を丹念に舌先で舐め続け、極上の快感を崇雄にもたらししてくれる。

自分のことを『最高のご主人さま』と思っている彼女にとって、今のセリフとこの熱烈なフェラチオが最高の愛情表現なのだ。

（うううううう！ これじゃあ、ますます一人だけなんて選べないよ！）

己が気持ちよくなればなるほど悩みが深くなっていくそんな状況の中、

「ちよっと！ 横取りしないでよ！」

「ああん！ ご主人さまへのご奉仕中に、邪魔をするとは何事ですよ！」

二人は再び小競り合いを始め——その結果、一本の肉棒へ同時に口奉仕を開始した。

（うわっ！ マジかよ！）

崇雄から見ても、右に奏、左に綾佳。

完全に真上を向いた勃起ペニスを、学園ツートップの美少女たちが両サイドから舐めまわしている。奏が男根の根本から先端までを大胆に一気に舐め上げると、綾佳もそれに對抗するように逆を一気に舐め上げる。

「そ、それッ！ そんなッ！ き、気持ちよすぎるからッ！」

桃色の肉片が下から上へと勢いよく滑っていくたびに、頭の天辺から足先まで痺れるような高密度な快感が迸る。

これが舌一枚だけだと奉仕を受けていない部分が大きいが、二枚もあるため愉悦の量も充分で、亀頭の中からアッという間に先走りの汁が滲み出す。

「ああン♥ ご主人さまからのご褒美ですわ♥」

「だ、だめ！ ターくんのおチンチンから出てくるのは、全部私のモノなの！」

フェラチオ経験者の奏が、味覚器官を目敏くそこに伸ばしてくると、これがフェラ初体験の綾佳も、恋敵に対抗して同様に舌で躍りかかってくる。

「そ、そんなッ、ふ、二人一緒に先っぽだけ——つくふあああ!!」

二枚の美しい桃色舌が亀頭の先端を同時に舐め出して、尿道の入り口から快感のプラズ





マエネルギーが逆流してくるような肉悦が逆り、顎を大きく仰け反らせてしまう。

綾佳も、奏も、恋敵の舌に触れることなど全く厭わず——むしろ先端の小穴を求めて、相手の舌を押し退けようと密着しあっていた。その結果、二人は大きく舌を出したまま、崇雄のペニスの上で舌を激しく絡めあわせている。

（これはエロいよ！ エロすぎるううう！）

ただ気持ちいいだけでなく、視覚的なインパクトも強烈だ。

清楚で大人びた美貌の綾佳と、上品でノーブルな美貌の奏が、まるでディープキスをしているような、濃厚すぎるダブルフェラである。

肉先で絶え間なく炸裂するヌメった快感に腰の辺りをビクつかせながら、崇雄はその原因である牝舌の絡み合いにしばらく見入ってしまった。

「どうやら、口便器として最低限のことはできるようですね」  
すると奏がおもむろにその美貌を男根から離す。

「く、口ベ……って、もう、何なのよ、さっきから」

綾佳も相手の出方を窺うように舌を引っ込めて、間合いを取る。

「ご主人さま。失礼いたしますわ」

「え？ って……うわあああ!!」

すると奏がいきなり崇雄の両足を掴み、それをこちらの顔の方に向けて押し込んできた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!